

太上天皇

薺の卷に古位すレアモヤリ  
ちうきの春にアレルの桐葉だと

花房

左院の古服アドロアリヨミテ  
秋ゆ中え 又六葉四見本

アリハナヤサニムニミシキニ  
ケニシヘ内セシタタタマヒテ  
梅つアトヤギヤクニイ申ムニアリ  
御法よ白若えにアセシタマフ

桃園が都の宮

アリハニの春に古御見絵とアセセ  
タマスアセタマニアリヤセ

桜井院

桜いかとれいはきにカタマリ  
アリハニアムアシタマニアリヤセ  
タマスアム女も宮とアシタマセ

三宮

院アリハニの服や桜政ホリヨ  
成ルアラムニムヨカクレタマ

女宮

アリハニアムアシタマニアリヤセ



女宮

えりあまにほひよめうる

朱雀院女御微腹大右

相臺灣にまくはりは御佐  
はきらをほくに侍不春  
ゆつまよにれづかて  
行山の寺にとせらわす卷  
朱雀院五が門に一院と  
ころむとや

今上女御番殿女御

河内卷に二歳ともゑどくに  
春梅うそにほえ服うそみ  
下に侍よけをほく

春宮女御のゆま

つるの上にまもて回下  
侍よめ

式部の女御にゆま  
匂え夷に父房中もとゆく家  
だの霞殿とやすらまし終文  
ときのかけくの式部の

勺兵郎女官

毎日上

あ葉げとすらすまくま  
え服さく兵部よ但しきま  
上りあいじゆこえや

うるあまつもつま

上るまいむへ 三えや  
若君 めぐれやも

やうされ奉にまきゆ

常陸え めえ

匂えは春にうきめちわのくられ  
うきうきまくら日丘勢

宮に匂ひをほりてくえとさ

中務え めめうさま

おうみやの日夕多れかわよ  
みきとて車に乃せられえ  
あはくやみおうみのびだるみ乃  
ひまつねみくらきとくの  
のみと殿よさうりへ

一品え め月もえ

あれとまどるういむてたす院

ひけたすうりへ

女二宮 めあまゆ

をくわきだらめゆめくそ

蓋大ぬとじこにうわくす

女一宮つ葉ひよみゆ

さうこのえ め原見前

えうみトよ柏木の草宿の

小方に成後み後よ夕多大わ

からくわくわ

からくわくわく

二品内親王 女之帝原年支  
あまのとすあ院よ清とて同

トヨニ品一物りそまき奉た  
かづくをじとひ

女アミワシのうすみ

六院

内相兼更衣

て威して涼のはと清と十二月え  
朕そきに中ねの葉をよ三臣あ先  
おう卷に宰相を先りのひだる  
次の卷に浦よりもめを奉に  
却よゆを待てすみの極細  
に成へをほくに因に居ともちよ  
ひ位りて牛車の宣旨をう

ウシ安に太政大臣がく葉に

太上天皇乃ち号をうむ

夕霧

内相ひのく

刀をひげじらもくみ昇度を  
のうて明てのまきあしかのり  
おう卷に秋除月にうづき

朱雀行幸の仕事よがくも

うに中将友らぬ宰相を

すばく事に中納言つゝれと  
左將おうと匂え奉じて

左將おうと匂え奉じて

左將よぬと匂えをまなびて  
行けよた右臣 辞大も

右馬門侍 む三乗上

左宗よ下に朱雀院にかは國  
れの童にしてあやき女樂の夜寝  
あさとあら寒のうる骨  
おはぎ人みりす音歌の處  
にて、葉の處ア日中三時  
にひかさまて、うる骨寒  
のすきよ刀くそり

中納言 カノ内侍のすり

六条院あれ古シテ御引  
終次高君朱雀院の店がく城  
樂あうと高日阿小君とま  
あらぬとあらぬとあらぬとあら  
宮乃表にのわらぬとあら  
とわらぬとあらぬとあらぬとあ  
侍臣宰相 む不審三乘上

左辨 む三乗上

匂えをまなびて  
人推下にあらぬとあらぬとあ  
あらぬとあらぬとあらぬとあ  
侍臣宰相 む不審三乘上

宇治アラマサヘ

源宰相中將 む三乗上

源寧相中將 女三束上

とといひへやわ行けよ三佐軍  
ゆう一卷に寧相中將をに稚  
わねどこすよまわれまきこと  
ゆうひとじてから慶上一経と  
ゆうこのくじら

頭中將 女方内侍

竹門トほり將とづやわきらる

高六君にかひきらるあうちと  
とのはすておひきとくとく  
し櫻井にひぬるとくとく

足信中將 女三束上

一忍文内中將の様行の儀勢  
りくか高の山にひきとく行  
河よ年來作櫻井よ弟金雲

といつう

童 女

たゞやさしうとえ女三束を之  
きのー内中將をひきとくとく

春宮女郎 女三束上

匂ふ春よまめよとまやわ

中君 女三束二三束を身に

三石 女三束上

四束 女三束上

日記 丙子年上

三月 三日 二ノ夕方奉事にあ  
六君 おお内さんやうすらうみの御事より

葉喜太将 お朱音院女士ニ

匂宮乃奉にえ取て宣傳行と  
ゆる其私を申ね御奉に伝  
して寧相あくわ行は申候  
宿の二月廿日は松浦さんと  
太田将と通す

明石中宮 お行のと

乃日は三月四日は御はれ  
給ねぬよ京のからて大井の御  
應書、お車をじん間がく様  
ままであるて御車をとめは  
小中えり匂宮奉に匂太君ニ  
（一）の様よんです

### 匂無御の宮

ととくえまきとめお朱音院の  
行幸のお無御とあじてお車  
（一）の様よんです

侍は おのの君

梅うえよお車院り又御はれて  
（一）の様よんです

童音

同

きてお葉喜太将、お朱音院の御事

同

き二ふ葉代に朱雀院の爲  
の御承より方威承まひ候

官御方 おとせ行上

ちえどせ待て後母君にて

お梅のまきに拵る夫徳翁

伯翁句答詠またさくらをばん

室宮 妙善音殿御

お筆がよきにて秋風まほし人

跡文

嘗にあゆみのうけむして御  
の無教でまことつひすかてみ

八官 妙善女

官房よしうらよしめ此卷

よみそりてそののまくさ

総角大君妙善行道にうき

中老妙おさ

けくとお勢風あおひさ

廟よ三國院(し)へてまいた

三老 妙善院。今のかはく

やうすにひづくわせりてち

まようじくわせりてまよま

小序

式部の官

河すかの春心もとめどまよ

式部の官

河原の春にまつわるとまこと  
あさひかへてけの春にまつ  
つよしのうの侍の侍の侍の

侍 サミの侍

えも サガリ

うえど後め石の風の風  
Pのたわとがよし

冷泉院

母院をまか院をまか院に斎延

下にまみをほほよす即信  
ひづりまみをほほよす即信

一え母娘共に大手女と行け行け

うの女三え母三え母三え母三え母

品宮 母三え母三え母

女三え母三え母三え母三え母

女三え

前院 ちあは寒行の寒にあく

御とひやまきよとひやまきよ

ちあは院の古服ゆかひゆかひ  
ゆかひゆかひ

先帝

源中納言

式部のえ ちあひをひとひとひとひとひとひと

光帝

京都ニミ

源中納言

紫に衣冠萬葉が之に豪虎の浪  
りせらへて下はゆる

若君

朱雀院御城の日向

慶章す

中將

侍

臣鄰大輔

少主ノ娘ノ君ノ將の處され  
一内之のとよしより萬人  
頃用里ノ將を

世上女極を中納言

十人十人御連坐ひ下り候後  
れ葉に車をゆくほんに  
冷泉院女治めのたま  
しよ内ノ子に下りて  
おれを下りてあるのである

秀吉院右殿で有也

相はゆき事あつてあつたと

すみふ葉がよまえの女  
御をあえて后よき林よか

序をあえて后より承りや  
やくじやアシテアツマト太上天皇  
よろすよみか射はうておと  
す所をまの奉にうちれら

源氏宮 妻衣

朱雀院春元御内侍ありて  
女三えどうし給ひたるゆき  
うせぬけりの事は今にみ

常陸宮

阿闍梨

源氏のい薄をもてりて  
とれがさとくわくのゆゑに

蓬生君

すみけすみ花の奏ほせんよ

りひきをすよ東虎よなづる

・大政大臣

相手不ぞをいたしてほせんが  
冠きくや林の奏ほせんが  
ひづよ太政大臣と大政大臣  
の名をひく日よせら

致仕大臣 妻衣

相手不ぞをいたすに頼むわ  
お車をまよひ徳下坐は車相

ゆめやくまくつてお車を仰  
ゆめやくまくつてお車を仰

おまえは  
おまえは

太政大臣の奏下に御は奉  
をうへて御はせましりて

春のあわや柳の枝の細葉 やす季節  
し女よ花をさむへてまよひやわ

大業ノ事  
其ノ初ノ事  
其ノ後ノ事

紅樓夢  
卷之二十一  
上

うめに寄りて韵を取る  
と有意味なり（凡ては）  
元服（もとふく）をめぐらす事は珍らしか  
年四十五、左大臣宇治守より命乞

之  
此  
人  
事  
物  
類  
似  
於  
我  
所  
見  
者  
也

言と之の行向よ方初雲在大院  
かくまを大院成多心

又推左の身事に付かず

大德之言也

卷之三

子孫傳之不以爲珍也

の梅卷といふて其都を主味  
の君れどもひし

簾泉殿女侍の手に寫すま  
中君

元吉の筆にて有作と書く

薦寧相

あ葉下にいとめのくわく  
せうへうきのゆゑにまに  
つまづくし物語が三行す  
一やすじよきはよと  
冷泉院よまやと通じりや

頭中将

翁人寫

世二木の下に卷に之多のまん  
かう帝殿上に絶えぬ而て  
すやくくちらめのまこと  
ひづみ夕方たる事多とひ  
候とゆえてさよやとひりいよ  
て文やくわまと圓日うち  
ひとよとのむらうひとひ  
少納言と參軍佐竹義定とは  
ひとびのまの下にすれど  
筆走り大丈といつてもひくほ  
八部志

八節志

まくらのまよひの時をうそ  
あつて夜のくわむ行幸を笑  
よきすいとひだりと  
もせう尚ほ みたびのと

ゆうたかとのやれどうて  
はうへく年てむくはるに  
まのうすめをめおと毎  
黒へがのうにあひ

ひ徹風度 每月柳友

力をくよこじて肉を手

夕暮れの間をねねて細きもの

まのうのうかとくらすとく  
近の君をうきうきとく  
あくとくとくわ

丸中母

あまくにむけ(通)の古のうとく  
人衣のうよゆるをかとまのひと  
ごとくかくすまの夫れ  
あくとくとくわ

友大納言

春宮大主

さくらのあまくにまのうとく  
けのねはれのよしとくまの  
まくらのやめとくわとくわ  
しめ、まくらのやめとくわとくわ

年は人を殺す事もあらず  
し女に金幣とやうどりの

とにもかくいふ言ひを御清き

白

麥上 お宿四より

阿久の春に夕方をさう  
てじゆめ

二原太政大臣

朱雀院の御内親翁齋  
明石の天政大臣にてじゆめ

廣大納言

駒井柳子日向と通

鶴京殿女清

朱雀院の御内親翁齋

ア佐小将

アおもれうそいわばま

ひじくとまて衣るのうな  
うことやけん

たすき

アテハ涼風の月夜の銀河

ありとお陣の車両を一けて  
アキラハ秋風の出合の

かおうやくとみ林の春よも  
もれもひとひましくじら

鶴京殿太后

弘徽殿太后

生産院金毘羅御子室太翁  
ノ物語ひづれづれのとよもの

嘗てや方花のうるまよみつ

改仕太臣むは思とすとき

六君 花のうるまよからり

跡日向の尚侍

葵に朱雀院と手てひくす  
歎とすの柳乃二月もあはま  
べ下にたよ成ら六の元とつう

た太臣

女御 冷泉院の御事すれなむ

左太臣 梅うきの左官の草むのとげて

大あら

鶴壁文はテかほひの御事すれ

鷺葦女侍

今よまえれぬりもうけりゆの  
ゆふよわゆきゆき女ニえぢりや  
ちやくじゆくやくやくまたかく  
み梅うきの鷺葦女侍とまつこ

天このくじや

左太臣 行川の行川とす

か夕暮れゆのゆの寧相中將  
彦ノわとすにゆのひみゆき

あくやとすにありひがひ  
左大臣今とは徂るよを原の

輔臣太政大臣

さうたる事にいたれど  
曰下よ左大臣にて左院を待す  
前帝か一酒を一坐太政大臣  
うねらう竹門よからざり  
左中納言母御さま一女  
まきね十つもて風とて心を  
竹門の前よめめあはれと  
きてらしくやつまにあはれ  
の旨よりとみの

次郎君ぬき

まきねばかりしてゆゑにう  
きことのゆくやくは軍を  
ゆくやくす

左兵衛卿母もうの上

ふまの下にまづいのをす  
おまえ年老むるがの旨とすま  
いへ行けよ死ぬゆどゆゆ  
奉公を重ねてれ多うと  
ごく常おこなうの旨によ  
うとうのくじ

左中納言

じテもくのをよつてす

レニモテのをとあらわす  
シテメテあるをまことひが  
の流學ノ日より其の間も  
はとあらず行は奉る所は未だ  
在大半

頬す將舟一竹の船内に及  
林林上 ササセ言ひよ

あ葉城下に當兵部三木の方にか  
まとせば後之稱大成大  
納言とよし内少方よ成らるたの  
ね、我とどうぞあらへん人  
事 ももくはる

竹の舟を落葉院(立山)に移  
旁の少す事相わぬ事くみる  
とす

尚侍 母治よお

竹の舟を落葉院(立山)に移

成くやしてゆてあらは

半將

原風太ふとまつてゐるの爲め  
らもむきとてとくとくをひそひそ

をうへて落葉院(立山)

兼吉殿女

生着院乃女は今上の御内侍  
ひそひそひそひそひそひそひそ

大臣

六条御是也

すばにて前坊でもあらむはせ年

おぬゆゑとより十九歳をもと

角給三十にて嫁ひ并えすうせく

きりやんてくよのやうてほめ候る

大臣

都御 宇治ノミノは母

大臣

宇治えや方

いめもとすらをすまへてこれ

給ふてくろゆよみゆ

宇治えや方妹

おととじて原

常陸えや方

宇治の高き才方のみとひかる  
君とてえをすくひとせ方と  
おてかれてまひの君とひかる  
後よひしよてすとわく  
うやき

大臣

入道橘麿之子

近事中將のつとあらう辭て  
ワよみとくわが四までくわ  
おうわよとくわのよまとには

ちうりやとみのる事には  
浦をもつてさき山よりは

明石上母野村がものひす

松もよし浦をもれて木井よ

ほりしゆよたか院よつらて  
えひゆうどすも

梅家大納戸

やまね院律師

原氏元をさへすアミとぞ

さかみいのくはぬうやまと

相撲更衣

原氏元をさへすアミとぞ

ゆうてゆく向葦をゆうて

きのよじと三位をさへ

桜家大納戸

紫上母 母少弓山信教母

梅家大納戸

ひ扇子

そもよす海舟一主やてやそ  
ひやいきぬ版せしとむとす

大将をうとふづりよすも

たれよわいしのむけしこ

桜中納戸 在翁行かとも

たまは

枕草子

たまつ代

源氏物語の事とての意をそ  
あらへ、かくとよひて、  
えうてひじきうちせかひのう

わはな君の方から

わはな君

えみゆめをてほづのま  
よけくひづてくら  
けうてくらせんのりて  
きうてすまよせんてく  
尼よかく二葉院の生産すき

布施

女小野原やわらぎの事方せ

東淺見内下

め名取老乳母 母院宣旨

源氏くじらかわ

おれのよしをこしておの

アヌ

三位ゆね

夕朝上

おは乃きくわがるまよひ

りしてむくをさすまよひ

不宿すほせよひよひよひ

院とわじよひよひよひよひ

院とやじておゆきしてせぬ  
とす

宰相

宰相君

もうれいの女とて六歳に仕合  
一ひとのゆすまし竹内  
表にうるすよしあわせ

急議有る推光

くの田染を浦さんした  
はちじたまむけく梅の霜

舞馬廄

童にて廄とをゆふと音節  
タ義務のそりゆげば、梅  
うそに舞馬廄けはれ意  
あててもうしく

藤曲侍

えひの東の夕景の骨  
人ふ草下にわらの草とある  
山門南根推光あにときてにんぐ  
久将令侍タかのむかづる  
三河ち妻タ春よ木戸のやうすき

前橋慶子

源義清

良河海ねこじまつ用

あ葉に夜にすゆみのて  
み納まことのなきよくすく

ぬ納まことのたとへよ鞠實作

あすやすすじとくもむかすす

あそし安樂にゆきはやくほゆる

丸中子

さくのまかうかのさくで  
キたせきの乳母

女三歳の乳母、童子の  
よきの事よきよきよきよき

アギー早蕨のさゆ

伊多

うの伊多くらき成て  
セモレのさゆわゆ天にせぬ

紀伊守

原田がいのゆ山の家に  
セモレのさゆに成るゝ道と  
ちゆにゆ

毛大庭の監

原田がして安虎の内役よて  
くや大ねはの浦よせどひ  
けより屋上れりてあつて  
きゆのりて鞠實尉よ成る  
よつてよしゆき

毛大庭の監

毛大庭の監のまじめ原田

うせとぞのまじめ原田

やほのとみけのようひかて

おとれぬをしとたんと

よみつゝやへん

**常陸** あらそひのまなむら

あくまにまわはるえ

（もや）人

あくたれむをまかく  
うらちあしめゆらもか  
まくあくすくわまわむ  
よだりとあ

童 めぐり

てきひのをのこぐと  
てりりめぐれててき  
原めぬま めぐり

めむか 方 めぐり

てきひをとめぐりめぐり

よみけやへん

**太寧太武**

原めぬまをとめぐりめぐり  
よみけやへん

よみけやへん

前もろよほほすとあく  
みさら

ほせのいとくやえだつて  
ゆうの東のゆめみをそそ  
し安東にきはづくとくの

太寧々威

タラのとまのとまと

豊後み

ちやせむもくわをみて  
のくと原にぐらはせゆる  
のあひじくわしき

次第

三郎

ばらく山よやまけて京

とくのりく

揚名ふまタラの東にあ

姉

これとばよやつてのび

兵部君

りといあときとつまねえに  
うてのひまね

兵部大輔

大輔令席

母乳

まつじのとくはんにまく

兵部太輔

大物令婦

母乳

おつじの君のと原代によけん

不載系面カタチノマツキ不載カタチノマツキ

相撲妻

後冷歎更衣 相撲妻更衣 韶負

肉アヒ

右大辨典アヒノマツキ

友達の安右 大元卿

内侍

令婦

馬頭

左馬頭 虚武狂也 左馬狂也

大納ウナ

本摺妻タラマ

義ヨシ

中納ウナ

中摺タラマ

日ヒ

中將君ウジノコ

而アリ也

民勢ミンセイの才タレ

タ裁

大貞乳母タヂンノミツメ推光母タガタノミツメ三河ミサワの揚若母

中わ君ウカクニ官女クニヒト大庭タケニ官女クニヒト推光母タガタノミツメ姿ミマ

タ松タモ乳母ミツメ御ミツメ内侍ウジノコ文童モンブ十

着アリ也

小野オノ小僧スムニ小僧スムニの上ウエハシ母ミツメ母ミツメ母ミツメ母ミツメ

吉上ヨシウエハシ母ミツメ

大納言

大納言

大納言

大納言

大納言

大納言

・宮上外祖母嫁大納言　・主令婦　・年後年

・たゞ上女房　・密教心方　・小御乳母上の

・出侍大納言　・主令下婦　・年後年

末摘花

・左裏門乳母 大浦令婦 茜萼乳母の乳母

・中納侍妻大納言婦　・中榜

謫居  
官女

・末摘ののと 仰天あやまつて・女院

・左近令下婦

紅葉袴

・左儀尾高絆

・左儀在宿日上行

・左將

・兼吉殿

・左將日上行　・令婦嫁

・中納云君為意

・中務君日上

・小納云令下

・太三

・一院

・源曲侍

・院御文

花裏

・別人ゆ

あづい

・安院未摘　・小納云めい　・は連は

・山之度き

・寧相君クニ

・中納云君日上

・あり美上　・主令婦

・やわ君宴

けづき

・主令ぬ　・肉飼み　・小納云乳母

・左裏上媛中將

・中納云脚月夜

・弁女房

・中令史

・式部主文女房

・安院未右　・山之度き

・横川傳教おもて

・元和もともと

花ちるかと

蘿東殿女相手の門内女也

花ちる里花ちる里也あひ

花ちるまと上女ほくめいとくわ

女郎云の賜合さし

もぬ

花ちる里花ちる里也 中納言君 富翁富翁と妻上

まよ姫

蘿東殿女小納言也

中務宴

出儀也

中将日王 命婦

けりのマ月上

大氣太氣 とちとち め石上女

まきのひめ

あ

奈良流傳の下をうへて筆下す おる上女

花ちる里とくの上

波漂

タガメタガメのと 中將官女 中務月上

花ちる里左院宣音の娘也

蘿東殿女おほち おまめ別おまめ

おまめのと

蓬

侍臣

女院セイジン まむね

大氣太氣 おも

大氣太氣 おも

未橋君未橋君れ亂女

おも

未橋君れ乳母とす わわ けふそのまく 花ちうど

國を 別へ

あわてて

前安主前が西・後翠華相入ぐ  
半日の手を極み・はなむけの日上

ぬ將命婦内大威外の内未橋君

兵部令内日

きくら侍師・尼翠時年齢はら

わ風

花友里上・ぬ空母・中務親王の祖文

医敷浦

わわ

難翁

毛ノキ内の内大木

わ風

ゆるよ毎・ぬの女房・花ちうど

中将官内傳教下は舊宿院がもとより  
冷泉院主者なり人

わ風

模の安院宣旨・涼風待たぬてゑ  
花ちうど

じ女

模安院宣旨・医敷マク音あさきと  
着用せり

左軍内御門

左大内入室日と年月人名人

医敷内日

大内記・玄井序内

模安院宣旨の入内か方

こうこうといつて 小竹籠かづのこの

寧相君タキチのものと あ井序内乳母

寧相君タキチのと  
安田の女アヒラミ  
上使ミツシマ

むづ

右近タカハシ  
太史監タガヤシクニ  
文藏モンジ

三家ミツカ  
越カムイ  
花ハナ

ごくろ

中將ナカヨシ  
これらコレラ

かみきカミキ  
右近タカハシ  
かみきカミキ

門モン

太史監タガヤシクニ

ミニマ

あとのえアヒトノエ  
えまひえエマヒエ  
松原別院マツハラヘイエン

大輔タケル  
シテイケンガフ

中納ナカミ  
ミツシマ

がやめ

右近タカハシ  
まくまく

野ノ

寧相君タキチ  
内侍ウチヒ  
花ハナ

大馬助オウマス  
タマリの家タマリノイマ

行幸エイサク

右近タカハシ  
あくたにアクトニ  
尉イヌイ

かうじゆ

弁もうちヒダリ  
のち方ノチカ  
お二君オニクン  
舞モチ

またマタ  
かわ

弁もすのち方・お玉君・舞は官女

中將舞とのかみ・まこと連毎中納言

寧相つとめく冷ひやむら

### 梅つえ

大前おまへとある・花らう里・肉にく行ゆき

た大將おほしらとある・花猪けいしやとある

雪糸の彦ゆきとのひこと・太白たいはくとある

中務なかむえ日上

### 蘿の葉

亡母侍臣・清併きよへい山道時・中務なかむ

さの彦さのひこ・める工めるこう・花らう里

大丈の乳おおじゆ・モサのひめのと・さほすかと

寧相乳なつきあら・花ぬれ・太女將

### あら葉上

未産院みさんいんとある・不女更衣ふじゆうぎ女三文乳

た中年なかね女三文乳と・女痴めぢふりあを

えみのう・う・たと・たと・中年なかね女三文乳と・さう

山度さんど・花上使はなじ女・中務なかむ

中の月・中務去君なかむいそぐみ・和泉翁わせん翁おきな

た大將・ひ中ひちゆう・花らう里・あらうり月夜の中納言

明石上母・春はる宣のぶ曲くに代しろ・花らう里・小侍こし三みののと・童わらわ大お内うち藏くらの時

### 同下

意上使いじや女・花石尾・中務君なかむ官女

僧そう教きょう小山僧こさんそう教きょう花うり・一葉いっよう身み所

同下

・上使女 める尼 中勢君 魔女  
・僧女 小僧女 花うき里 一乗院鬼所

・爲葉ま 小侍みやめさこみれのと

・行乞女 女三みめのと 柏木大傳乳母

・花房の元よりの太仰おほあひせてのらしくかづく花房  
・月へいわゆるにしる

・安院やすみから多の酒譜 桜庭さくばの名 腐女房

・源中將 桜庭さくばにりづぬ人

・柏木

・小侍後 リツみの行者 柏木乳母

・才美大丈 一乘院鬼所

・十ね君 一乘院鬼所のめいだかちだくの

・よ二弟

・小侍後 リツみの行者 柏木乳母

・才美大丈 一乘院鬼所

・十ね君 一乘院鬼所のめいだかちだくの

・タヌ

・一乘院鬼所 一乘院鬼所

・女三官乳母 大慈浦 厚善宿

・タヌ

・死ちくわと

・ナヌ

・中御主毛 やね毛 もちく毛

・僧女 夢佛の事 佛ノ僧道寺師

・柏木

・別へう

・桜庭さくば大納言有妙方

もえ 別人

紅梅

桜京大納言左の方

竹川

たよだ されど カわのむと

宇治ノ部

アラマサニ

阿園柳 宇治小竹也房 桜京  
危邊わ壁うかのえほひ

椎シモト

アラシ

緋角

阿園柳 中宮大史

早蕨

阿園柳 大史君 カタハ女房

ヤツツギ

上殿文後上にさけ 大史君 別人  
梅を乞おねがひ 花有ある だのえ

蔵チモト 中宮チモト 中宮大史

あは

源サ納言 リキモト たよ

は舟フネ えしめと 大史ヒム 傷ヒナ

サねサネ 姫ヒメ 中宮大史 幸ヒマツ 純シロ

侍シテ えみエミ 女房

アラヤ

大浦ヒラ じゑ 中宮ヒム 大内記道定

事アリ 情シヨウ 土居橋ヒタケ 田方ヒタチ えらひもれ  
行アリ うらアリ いふやまアリ うらアリ いふやまアリ

三  
九  
九  
九

卷之三

さやく  
行ふと  
めのこ  
さやく  
土を植ちの方へ  
めぐらま  
きれ

た邊の事あはれ乳母まつね  
ゆゑか。因おもふるの家いえ  
大義だぎ浦うら仲信なかのぶ  
ほ舟ふねの乳母うぶりえ乳母うぶ  
たとえま。山庄さんじょうたとえ  
とくに。日今ひごろ人ひと大義だぎ史しいよ

A decorative initial letter 'G' written in black ink. The letter has a long, sweeping vertical stroke with a small loop at the bottom. At the top, there is a flourish ending in three small red circular dots.

左近が身にまかせ乳母時方

はくまのくわんのまほくめんのたけ

同人傳の事より  
著者

可制之以小畜而一取之于万

大國をもて  
一ふさみ

馬乃万葉アノ萬  
ヤシトミの萬葉  
シハナ

年少のとて后のえ  
中将君 一郎二郎

之  
傳  
藝

模川傳教  
同傳教才子  
小野尾

萬葉集  
第三卷  
一  
萬葉集

北川  
七  
九

山の守

紀伊國太郎の  
生年はいつ方かのと

葛葉・座毛・山のす

阿蘭梨のやうと・寧相も一郎のま  
紀伊の大臣のま・吉高や方のま

守山律師

・愛のうかげ

横川傳教・小野の大志・よしわま  
紀伊守

先ほどのお詫びを重く思ひてゐる  
せうきやれのむかへたとてあま  
さすも同様にしておまか  
くちあらて辰時まつまの方あや  
ちうかくじばのゆうりよん次  
ミヒニヤリとたまひ  
アシキナハのゆくわすり  
アシキナハのゆくわすり  
れおや・年族・うすすま  
玉のゆくと一季とてか  
アシキナハのゆくわすり  
とせうせうせうわすりのゆく  
つまらせるがゆくよひや  
おれのゆくじけで詔勅聞  
とげるつら書写本をなま  
ゆふかうとれおれ代乃  
もとあきしゆてあひのう  
擇すおりとれおれの譯  
聞れ花鳥風情を打てね若  
乃お前はい海のはあとま  
はうじまつまつまつま

圓れ花馬欣情を挙げて誓  
乃あ翁の海のまほと支  
は序あるあまくさひらいや  
もかとあくしといどせ  
つにじゆじゆくほひ  
りうきうきうきうき  
やまとみだきく今れ葉家  
おとじしげなびくほせき  
け中行なちやまぢにあ  
終下將來のちよのれ  
とおうへたるとすま  
アとまに長さみのと  
吉陽乃三月よりとま  
ちよりぬ